

## 「相互扶助論」の方法について

クロポトキンは、相互扶助論においても、彼のすべての著作と同じく帰納演繹法を用いていることは言うまでもない。ところが、この本は彼が動物の問題に手をつけてから、近代社会の相互扶助を完成するまでの間に六年間の大切な時日が必要であったことと、彼がすぐれた地理学者の本能を持っていたことが幸いして、彼が経験し観察してえた個々の素材を総合して、普遍的な原理をうち立てる過程において、知らず知らずのうちに、彼の本来の方法とは矛盾した地理学的な心理学的方法を採らざるを得なかったことは、充分、指摘する値うちのある事実である。これはきわめて重要であるにかかわらず、ただ著作活動の過程にあらわれた一現象であったために、残念なことには少しも注意されていない。

地理学的な心理学的方法を哲学の面で完成したのは、すぐれた現象学者フッサールであり、文学の面で血みどろな努力をしたのは、敏感なブルーストであった。クロは今や古いといっている連中に、かくも最近代の尖端に、彼がある意味で密接な接触を持っていることを強

調することは是非とも必要である。ある意味というのは、思考のうえで合理主義者であった彼が、マラテスタの指摘するが如く、実践の面で断然たる合理主義者であったことだ。すなわち、意識の面ではパンとミルクの流れる無政府の未来社会を必然としながら、無意識の面では、あらゆるすぐれた知性が望む現実ではなく、可能な統一への希求は忘れ果てたごとく行動したことであった。

さて、地理学的な心理学的方法というのは、現象を普遍的な一大原理のもとに統一することではなく、説明をあくまで否定して、個々の現象にそれぞれ等価な特定的位置をあたえるために、克明に現象を記述する心的態度である。(日本でこの傾向を無意識的にとれる優れた詩人向井孝、山口英氏等、の即物的形象派があることは注意を要す)。なる程、クロポトキンはその著述の性質上、ブルーストがやったごとく、あの乞食、この机、この花びん、この深夜の壁にうつる陰影にまで、多元的に記述をおよぼして、それぞれに現実的な等価性をあたえなかった。彼の経験、観察は限定的で断絶していた。これは彼のこの著述の制約として致し方もないことだ。而して、制約内においては、彼も明らかに序文で言っているごとく、個人の主我心の記述を熱望していたし、多元的に鳥類動物の相互扶助面を克明に記述した。これこそ意識的な彼の普遍的なものへの統一の郷愁とは断絶して、無意識が彼をかり立て、経験し観察したものの説明を抜きにしたすぐれた記述精神を發揮せしめたものと見ないわけにはいかないのだ。

## 実存主義哲学の方向

実存主義の系譜の中に、アナキズムの精神に通ずる諸根拠があることは、心あるアナキスト諸君及び敏感なインテリや労働者諸君のすでに気づいていることであるが、ここでは実存の最もきびしい絶壁のせん端に立つアブシリディアン、カミュのみについてしか書けない。彼が「不条理」から取り出して見せる、「私の」「反抗」「自由」「熱情」が、なんとわれわれに親近感を覚えさせることだろう。戦後派は知らないが、日本の古いアナキスト諸君は全く昔なじみに出合ったように感じないか。

彼の「明日」及び「世界」からのだんこたる断絶、ハイデッカア風に未来を招き寄せる「現在」の圧縮的な把握、夢であり、無駄であり、徒労だとののしるブルジョアども、セミブルジョアに過ぎないマルクス主義者どもを無視する徒労な運動への無限の熱情、その絶対的無神論、その断固たる多元論、その素晴らしい無償性、これらはすべてアナキストの武器で

はなかったか。おまけにカミュは、「無政府主義的な神のごとく完全なる等価性」には齒がたたないと断言しているではないか。このうちどれ一つを欠いても彼は実存主義者ではなく、同時にわれわれも無政府主義ではありえないのではないか。ただ、相違はカミュが日常性をひんめくった日常性の外でものを言っているのに反して、わが無政府主義者諸君が、おのの量的な相違はあるが、日常性の真只中において歴史的なその実践を果していることである。われわれは少数であることを毫もなげく必要なく、わが無政府主義が騒壇の品題に登らないことを悲しむ必要はない。

しかも、この不条理の哲学者に、統一への願望、明晰と凝集への知性の要求が熾烈である点を見る時、そしてそれをわがバクーニンの精神と行動に对照して見る時、二重の意味において、バクーニン主義との相似を見るのは、われわれのみではないであろう。

ピイオ・パロウバは言っている。無政府主義は将来種々なる転身をなして現われると。われわれは化身変貌におどろく必要はない、その正体をみきわめることである。

## 学校教育について

— アン・リネルの教育観 —

高校や大学への入試地獄の責め苦にさいなまれている生徒達と、じかに接している僕らは、つくづく彼らを気の毒に思う。と共に、その親達や一般社会の教育に対する偏見に、全く怖れ入らざるを得ない。親達も教師もその子弟を、より優秀な高校や大学へ入れて、ゆく末は重役とか、学者とか何んとか、兎に角出世の繩梯子に足をかけさせんとしている。

がしかし、これらとは反対に日本の親達や教師連の間にも、ニールや、リードなどの新しい教育観に賛成している少数の進歩的な人達もある。

即ち、ニールの場合は、強制的な一切のガイダンスの廃除、強いられた尊敬の拒否、出世主義の排撃、個人の自由と個性の機能的発展の鼓舞などがその教育の主体となる。リードの場合は、平和と教育との関連性から、普通教育から殆んど知的ガイダンスを除き去り、音楽と舞踊と絵画を用いて、子供の心と肉体の情緒的發展を意図し、粗悪なるものの拒否と優

美なるものへの深い憧憬とを打ち立てることに於いて、本質的に教育を平和に役立てんとしている。

こういう立場に心から賛成している少数の親や教師は、その聡明さや敏感さをいくらはめてもほめ切れない程であるが、それでも、なお、その心性の深部において、個人を相対主義にししか把握せず、従って、個人と社会との関係を協調とか妥協とかという位相でもって包み、学校教育というものを肯定的に観ているさらいがある。そしてニールやリードの教育論以外に、より徹底した教育論のあることを知らない人が多い。これらの人達に第三の教育論の立場—即ち、アン・リネルの教育観を素直してみるのが、この論文の目的である。

世界のアナキストは、国家を個人の最悪の敵と見る点において一致しているが、アン・リネルは「アナキストであるだけでは十分でない。アソシアルでなければならぬ」と述べて、鶏が先か卵が先かという問題に対し、断然、個人の絶対性を強調する。従って、社会は個人の極悪なる敵でしかない。にも拘らず、親や教師はこの敵である社会に順応することを子弟に強要している。この順応の過程が、所謂教育である。アン・リネルは教育の語源が「外にみちびく」という意味であることを指摘して、真の教育とは、その逆の「内にみちびく」方向にあるという。

個人を万人に共通な広場や因習などのとりこになっっている平凡な羊の群から引き離し、その個人が持って生まれた性質を自然に伸ばし、他の個人もそうであるが如く、個人が個体と

して絶対的なものであることを強調する。

自然なものは、それ自体絶対であること。だが、社会的な因習とか複雑なあわれむべき人間関係など、すべて単純な自然から遠ざかっている一切は、個体の絶対性と対立しているのだから、個人は先ず社会を無視しなければならぬこと、あらゆる社会的役割を拒否し、「自分で書かない芝居の役者にはならない」ことをすすめている。

かくして、各個人が全的存在となり、眞の自己を獲得した時、かかる個人と個人の対立を解消するのではなしに、益々極端化することにおいて、個人と個人との最も具体的な調和のある結合状態が成立しようという、大いなる現実的確信のもとに彼は立っている。

若し、これに反して既製の学校教育という過程にはいり、愚昧な知識を負い込み、道徳的に去勢された後、あり来たりな職業的地位につく限り、実に取り返しつかない泥沼にはまり込んで、自然な自己を台なしにするものであることをアン・リネルは確信する。一切の虚飾を去って、極めて単純な労働者——これは決して職業の範ちゅうにはいらない——になることを彼はすすめている。

ブルジョア共の教育制度から由来する、所謂泥沼にあえぐという前述の言葉が、単なる比喩でないことは、すでにウィルヘルム・ライヒが生物学的に実証している。即ち、愚昧な知識のデカダンスを受け、道徳的な去勢男になるということは、その個人の精神構造に病的なゆがみを与えるというばかりではなくて、直接的にその個人の肉体の構造に喰い入り、姿勢を

硬化させ、骨盤をせばめ、ついにはガンや結核などの恐ろしい病気を負い込みまむ。このことをブルジョワ共がさとするのは、この恐ろしい病気の惨害を喰い止める近代医学のすべての療法が、単なる気安め以外のものではないことを知る時までには、不可能であろう。

個人の持つ本来の自然の機能を無視して、目的のみを優先させる立身出世主義的教育制度は、かくの如く直接的に個人の肉体に、はかり知るべもない惨害をもたらすものであるが、世の多くの親達は余程進んだ人でも、学校教育を尊重して、その息子や娘を進んで労働者にしようなどとは考えてもいない。

しかし、アン・リネルの学校教育無用論が、眞理であることを思い出させるものに、サルトルをして七百頁におよぶ伝記を書かした「泥棒日記」の作家ジャン・ジュネがいる。

かれは孤児で、小学教育すらほとんど受けていない反社会的な、個人である。フランス文学の白眉とも云うべき、その彫りの深い彫刻的な描写、独自の哲学思想を彼は何処で学んだか。

彼は万人に共通な広場とか、因習とか、その他一切のコンベンションリズムとはっきり訣別して、極度の貧窮と飢えの中で、シラミや南京虫や乞食連を友とした。もし彼に本を読むひまがあったとすれば、大杉が「自分は千葉大学の卒業生だ」といったように、監獄にいた時ぐらいであろう。彼の初期の短篇は監獄で書かれていて、所謂学校教育などとは無縁なものであることを、ジュネを読む雅量のある人々に、心の底からさとらせる。

いずれにしても、世の親達や教師達の多くは、その子弟の本来の性質にはおかないく、自分たちがなろうとしてなり得なかった者に、子供をしようとする白昼夢を常に抱いているのだ。

(一九五七)

## 物の見方について

### △人間の歴史Vを中心に

神話の娘―歴史―を唯物論からわけ、現世紀後半を全く新しい個性発見の時代として、個性のルネッサンスを宣言しているトインビー教授は全く正しい。これは近來、ブルードン、ゴドウィン、バクーニンなどの新しい研究と期を一つにして興っている新傾向を代表しているに過ぎないが、日本でも唯物論者安田博士が「人間の歴史」を書き、民衆の日常生活ことに性生活などに重点をおいているのもこの亜流である。

今まで、歴史において人間の日常生活、ことに性生活は無視された。その点、彼の方法は正しいが、その思想は不満だ。彼は日本のマルクス主義者に共通する実に素朴な唯物論の欠点をソックリそのままましょいこんでいる。僕は何故に彼が古代人にとって最も重要な主体的な実践を左右する心理の面を、「人間の歴史」から排除したかを理解するに苦しむ。強いて善意に解すれば、腐っている日本ではまず、無数の実証をつきつけて、日本の観念論を克服

するためと解されるが、それにしても、思想的意味で政治的なおいが強すぎる。即ち、彼も日本語のウラルアルタイ語系属の原因を批判しているところで、その系属決定に至るいきさつをめぐる政治性を笑っているくらいだから、学問の政治性は極力非難すべきだと考えている筈だが……。

人間の実存的な感情生活を、経済あるいは単なる実証の面から演繹することは愚劣だ。古代人の日常生活を書く場合に甚しい。古代人において、人間の実践は経済よりも各主体の心理に及ぼす古代集団の集団表象が如何に重要であるかは、フランス社会学派が既に明らかにしているところである。

一見すると、彼は日本古代人の南方系属を証明するためにこれに異論があるわけではない。マダガスカル島にまで広がっている赤ん坊の臍帯切りの竹ペラ使用やイレズミが日本人の常習であったことを指摘して、古代人の生活を実践として捕えているような顔をしているが、これは日本古代人にかかる習慣が現にあったという「事実」を単に述べたに過ぎない。

感性として、実践として捕えるということは、彼らが何故に石や青銅や鉄などで切らないで、竹ペラだけで臍帯を切らなければならなかったかと云う、その行動の選択動機及びその心理的背景をえぐりだすことでなくてはならない。これは歴史の仕事ではないとは言わせない。

邪馬台国のヒミコの権力の動機を述べるところでは、安田博士はこれに可成り間違った心理的観察と可成りの頁数をさいているからである。では何故に竹ペラやイレズミのキメ手を打ったところで、それをやらなかったか。安田博士は、彼の背骨である唯物史観がヒンマガルのを怖れたからである。

例えば、W・スキートはマレー諸島で、臍帯、胎盤、爪の切屑などは凡て、黙示録的な呪縛の魔術力をもって観察している。

偉大なる実践者カッシングは、未開社会一般においては人間の手で造られたあらゆる器具は、人間や動物と同様に生命をもち、それぞれの場合に応じて、それを使用する人間に好意を寄せ、また脅威ともなるところの呪縛力をもっていることを証し、その器具の極微部の形まで伝来の形に反すれば、その器具本来の「力」を失なうと彼らが確信していることを証している。

従って、その器具の素材の採取にあたって、それが植物である場合には、それはある定った人の手で、一定の時期に一定の呪文を唱え、その植物の右側から、一定の月令の夜に採取されねば、その器具又は薬物の効果はなく、また、これらを用うる時臍帯を切るとか葉をのませるには、問答ではじまり、踊りや歌で始まる一連の熱烈な祭儀がなくては効果がないと、彼らは確信している。

日本古代人は、これに近い段階にいたことは確実である。近代人を驚かすこれらの生きた

生活実践を、単に保守、迷信と一蹴することは間違ひである。若し、これをかく信ずる人がありとすれば、その人は、古代未開人は、吾々と同じ眼でものを見るが、同じ心で知覚していないことを知らないことから来る俗見である。

吾々の心性は客観的なものをいやに重んじて、主観的なものを無視する愚癖が骨髓まで染み込んでゐる。そうしていやに分析的である。限定された概念の記録だけに血道を上げる。ところが、古代未開人の心性は、本性的に総合的である。彼らは表象そのものへじかに迫まる。そうして、徹底的に未分解的である故に、前述の器具、動物、植物などと人間との「同視」を、単なる古い観念連想、類推あるいは靈魂説的信仰によると解することは、べら棒な間違ひだ。

安田博士は、ベルツを引用して、日本古代人のイレズミの習慣を南方系属と決定する時もこのイレズミを素朴唯物論的に着物だと断定して、その実践の意味の追求をさせているように見える。

体に糸帯が描かれるのは、稲妻の印である。乾燥時であつて、彼らが体に画く線画と雨雲を呼ぶ稲妻との間には、深い融部の共感がある。安田博士は、器具と人間労働及び祭りとの関連を實踐としてとらえていない。彼らにとっては、祭り||即ち||労働であつて、まだ近代のように概念的分裂をしていない。これは、文化史上非常に重要であるが、ここでもう一つ注意をひきたいことは、これらの祭り及び彼らの保守的に見える行動の中には、本来の意味

における神の援助の観念も、祖先崇拜と呼ばれる如何なる徴証の痕跡も絶対ない事である。若し、スピノザが現代において、安田博士が観念論として無視した未開人の生々しい実践を觀たならば、彼は自分の「物活論」の生き証拠をそこに見て、定めし歎んだに違ひないと僕は思う。

(一九六三)